

— 確かな学校力調査研究事業を終えて —

「力のある学校」研究会 会長 志水 宏吉（大阪大学大学院教授）

「確かな学校力調査研究事業」は、児童・生徒の学力実態や生活実態、学校の教育活動や地域の実態等を調査研究し、学力向上に真に効果のある学校の備える条件を明らかにするとともに、学校の抱える種々の教育課題の解決に寄与することを目的として、大阪府教育委員会から研究委託を受け、私たち「力のある学校」研究会が調査研究を行いました。

研究の対象は平成18年度実施の大阪府学力等実態調査の結果から、成果をあげている学校を小学校5校、中学校5校を選定し、ほぼ1年（19年4月～20年2月）にわたり、対象校それぞれに研究者と大学院生のペアが担当として、1校あたり、のべ25～30回の訪問を実施し、観察・聞き取り・資料収集等の活動を行いました。今回の調査対象校の選定の方法は次のとおりです。

《調査対象校の選定》

府調査の対象校（小学校186校、中学校118校）の中から、次の基準に合う学校を選定した。

- 子どもたちを「通塾状況」および「文化階層」の視点で5つのグループに分け、それぞれのグループにおける基準点（小学校の場合は2教科で110点以上、中学校の場合は3教科で150点以上）を設け、それぞれの学校の児童・生徒の通過率を求めた。
- すべてのグループにおいて、通過率が、小学校の場合は75%以上、中学校の場合は55%以上となっている場合、その学校を「効果のある学校」と判定した。

（「効果のある学校」と判定された学校は、小学校の場合は約30%、中学校の場合は約25%だった。）

- 判定された学校の中から、学校規模、地域バランス、学校の社会経済的背景等を総合的に考慮し、小学校5校と中学校5校を対象校として選定した。

効果のある学校については、内外においてすでにくつかの先行研究（資料1・資料2）がありますが、欧米では主流の校長のトップダウン型のリーダーシップが、そのまま日本の学校に当てはまるとは考えられません。日本の学校では、校長のリーダーシップだけではなく、校長とパートナーを組む教頭のリーダーシップ、さらに「ミドルリーダー」とよばれる層の教職員の果たす役割の大きさが近年の研究で注目を集めています。

1) 欧米の「効果のある学校」の特徴

資料1

- ① 校長のリーダーシップ
- ② ビジョンと目標の共有
- ③ 学習を促進する良好な学習環境
- ④ 学習と教授への専心
- ⑤ 目的意識に富んだ教授方法
- ⑥ 子どもたちへの高い期待
- ⑦ 積極的な評価
- ⑧ 学習の進歩のモニタリング
- ⑨ 子どもたちの権利と責任の尊重
- ⑩ 家庭との良好な関係
- ⑪ 学びあう組織

（出典） Sammons, P. et al., 'Key Characteristics of Effective Schools', in White, J. & Barber, M. (eds.), Perspective on School Effectiveness and School Improvement, University of London, 1996, pp.77-124

2) しんどい子に学力をつける7つのカギ —大阪の「効果のある学校」—

資料2

- ① 子どもを荒れさせない
- ② 子どもをエンパワーする集団づくり
- ③ チーム力を大切にする学校運営
- ④ 実践志向の積極的な学校文化
- ⑤ 地域と連携する学校づくり
- ⑥ 基礎学力定着のためのシステム
- ⑦ リーダーとリーダーシップの存在

（出典） 志水宏吉『学力を育てる』岩波新書、2005年、164-169頁

また、先行研究においては、あくまでも調査対象校の実践を検証分析することが主でしたが、今回は、より多くの学校で本報告が活用されることをめざし「どうすれば、効果のある教育が実践できるのか」という、いわゆる”HOW”の部分にも踏み込んだ調査研究に取り組みました。

私たちが調査対象校の実践から明らかにしようとしたものは「効果のある学校」に留まらず、すべての子どもたちに対して、本来持っている力を十分に発揮させることに成功している「力のある学校」の姿です。

「効果のある学校」(effective school)

学力や生活に課題をかかえている
子どもの学力を下支えしている学校



「力のある学校」(empowering school)

学校すべての子どもを
エンパワーする学校

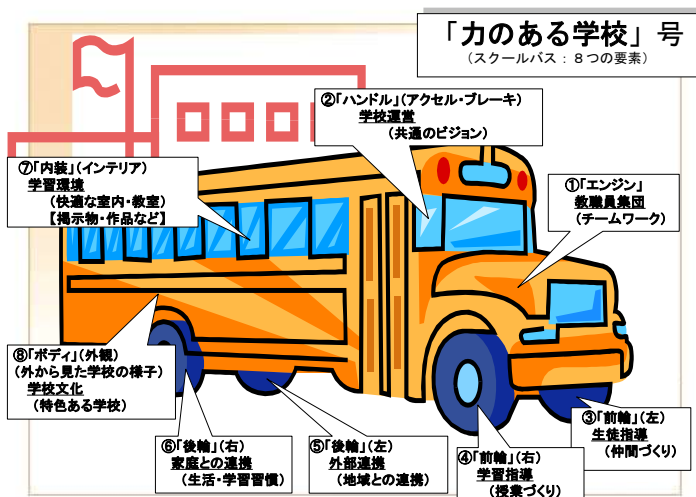
今回、私たちは調査研究の成果として、学校が備えるべき8つの要素をとりまとめることができました。

私たちはその要素をスクールバスのイメージで考えてみました。教職員集団の強力なエンジンと学校運営のハンドルさばきがスクールバスの中心であり、生徒指導と学習指導はバスを導いていく前輪です。校種間連携と家庭連携は下支えする後輪、学校環境・学校文化は、バスの内装と外装というように考えましたが、いかがでしょうか。

このスクールバスが走っていく道はけっして平坦ではないで

「確かな学校力」の8つの要素

- ①気持ちのそろった教職員集団
- ②戦略的で柔軟な学校運営
- ③豊かなつながりを生み出す生徒指導
- ④すべての子どもの学びを支える学習指導
- ⑤ともに育つ地域・校種間連携
- ⑥双方向的な家庭とのかかわり
- ⑦安心して学べる学校環境
- ⑧前向きで活動的な学校文化



しょうが、8つの要素をうまく連携させて、少々の悪路であっても力強く乗り越えていく学校の姿を思い描いております。

また、スクールバスへのガソリン補給やメンテナンス（学校への人的・物的サポート）、また道路の整備（社会の環境整備）を受け持つ、行政の支援体制の重要性も併せて申し述べたいと思います。

私たちが提示した8つの要素をもとに、大阪府教育委員会がガイドラインという形でその詳細をとりまとめています。

ガイドラインはそれぞれ学校運営の基本中の基本ともいえる内容であり、その一つ一つについ

ては、これまでも多くの学校で実践への努力がなされてきたところです。しかし、今回私たちが調査した学校においては、これらの要素が実にうまくかみ合って積極的かつ効果的な教育活動が実践されていました。

本書を参考にされる学校においては、ガイドラインの一つ一つの要素が、自らの学校において、確実に実践されているか。またすべての要素が相まって子どもたちの確かな学びに結びついているか。しっかりと検証していただくことが必要かと考えています。

最後になりましたが、本調査研究は、調査対象校の小学校5校・中学校5校の協力なしには成し得なかったものです。学校にとっては部外者である私たち研究会のメンバーに対して、日々の授業やクラブ活動、児童・生徒会活動の見学はもとより、職員会議やPTA会議への参加を認めていただいた学校もありました。また、忙しい授業の合間や、時には勤務時間後の私的な時間におけるインタビューにも快く応じてくださった教職員やPTA役員、保護者、地域の皆様はこの場をかりて感謝を申し上げます。

調査メンバー（「力のある学校」研究会）

志水宏吉（大阪大学大学院） 葛上秀文（鳴門教育大学） 新保真紀子（神戸親和女子大学） 高田一宏（兵庫県立大学）
西田芳正（大阪府立大学） 堀家由妃代（佛教大学） 若槻 健（甲子園大学） 芝山明義（鳴門教育大学）
鈴木 勇（大阪大学大学院） および大阪大学大学院生9名 合計18名